

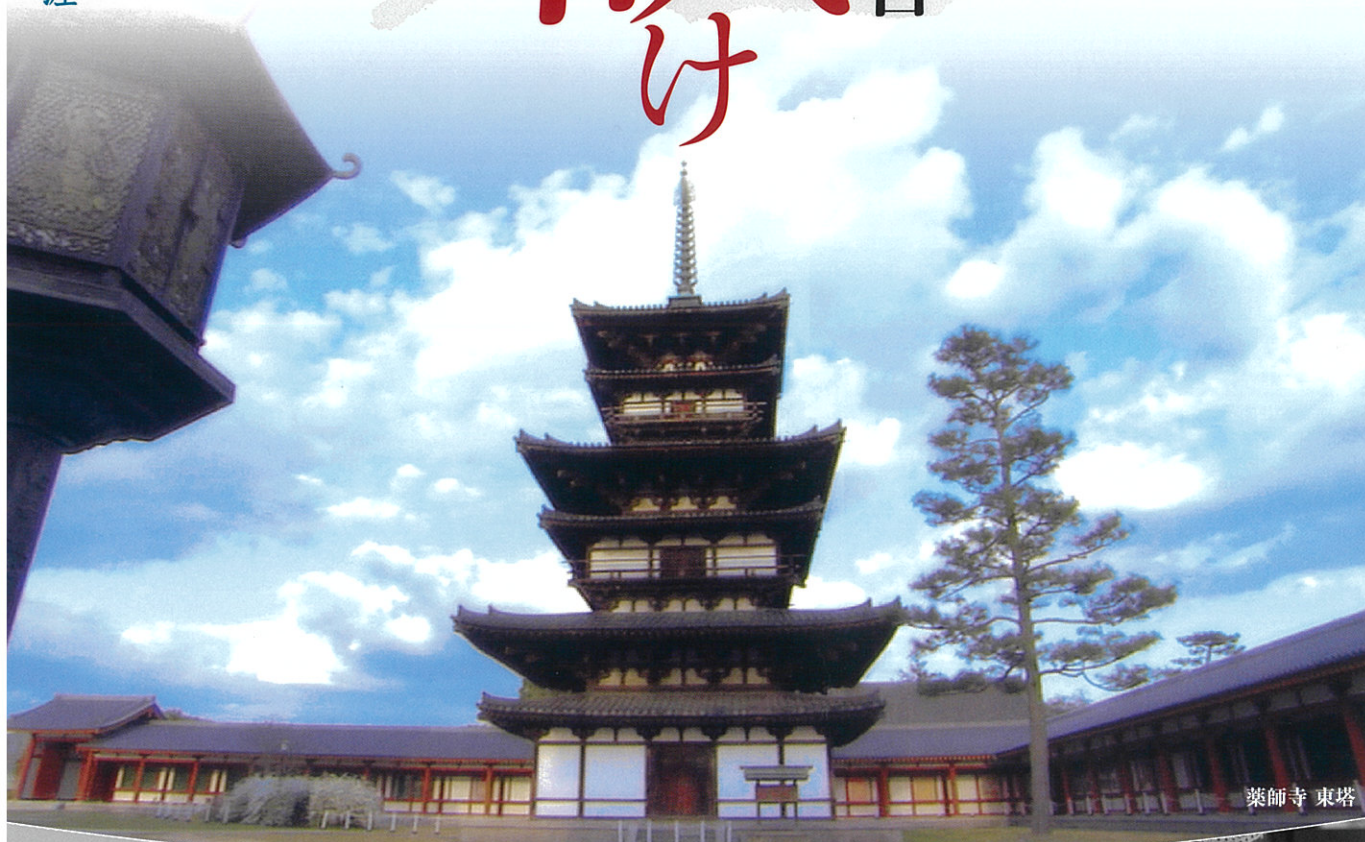
千年先に、いのちを繋ぐ

宮大工 西岡常一の遺言

鬼に訊け

「鬼」と称せられ法隆寺の昭和と大修理

薬師寺の伽藍復興に一生を捧げた匠の生涯



薬師寺 東塔



ドキュメンタリー映画



山崎佑次監督作品 ナレーター 石橋蓮司

出演：西岡常一・西岡太郎・石井浩司・速水浩・安田映胤（薬師寺長老）

企画：小林三四郎 プロデューサー：植草信和・朴炳陽 聞き手：青山茂（帝塚山短大名誉教授）・中山章（建築家）・山崎佑次

音楽：佐原一哉 撮影：多田修平 編集：今岡裕之 録音：平口聡 タイトル：上浦智宏（ubusuna）製作『鬼に訊け』製作委員会 配給：太秦 助成：文化芸術振興費補助金

後援：奈良テレビ放送株式会社 奈良新聞社 協力：彰国社 [2011 / 日本 / HD / カラー / 88分] <http://www.oninikike.com>

木が泣きよります
そんなことしたら

かつて鬼と畏れられた男がいた――

コンコンコン。ツーツーツー。鑿、鉋、鉋。音を聞いただけで誰の音かわかる。まなごしは、祈りとも魂の叫びとも聴こえるその音に包まれ、慈愛に満ち満ちていた。「千年の檜には千年のいのちがあります。建てるからには建物のいのちを第一に考えなければならんわけです。風雪に耐えて立つ――それが建築の本来の姿やないですか。木は大自然が育てたいのちです。千年も千五百年も山で生き続けてきた、そのいのちを建物に生かす。それがわたしら宮大工の務めです」。西岡常一、明治41年奈良県生まれ。木のいのちを生かし千年の建物を構築する。法輪寺三重塔、薬師寺金堂・西塔の再建を棟梁として手がけ、飛鳥時代から受け継がれていた寺院建築の技術を後世に伝えた「最後の宮大工」。平成7年没。西岡は何を伝え残そうとしたのか…。

木を切る「ちゅー」ことは
命を二つに分けるといふこと

木は鉄を凌駕する、現代文化に対する西岡棟梁の静かなる反論。

1990年5月、薬師寺回廊第一期工事。西岡は最晩年にあたるこの時期、癌に冒されながら最後の教えを若者達へ授けていた。「千年の檜には千年のいのちがある」「木は鉄より強し」。速さと量だけを競う、模倣だけの技術とは根本的に異なる日本人のいにしへの叡智、そして明快な指針。千年先へいのちを繋いでゆくという途方もない時間の流れが、所縁ある人々へのインタビューから浮かび上がってゆく。監督にビデオ作品『宮大工西岡常一の仕事』『西岡常一寺社建築講座』の山崎佑次、ナレーターに俳優の石橋蓮司、音楽にNHK連続テレビ小説『ちゅらさん』挿入歌作曲の佐原一哉を迎え、法輪寺、薬師寺の空撮を敢行。永遠なるものへの想い、そして西岡の深淵なる最後のまなごしを捉えた本作は、日本人が顧みることのなくなった日本文化と創造力を揺り動かす、日本の心の復興を願う「祈り」のドキュメンタリー映画だ。

千年を生きた檜は、
西岡棟梁の手により堂塔の材として
新たに千年の命を吹きこまれた。
胸に湧きあがる想いがある。

―― 随筆家 青木玉

木が手を経て建物に変わる秘密を、
これほど心を込めて記録した映像はないだろう。

―― 建築史家・建築家 藤森照信

twitter : @oninikike

「アジアの神々と匠」特集 (2023/4/11火～5/5金 ※4/15、17、24休映) 内にて上映

当日券料金: 3作品セット券 2,500円 (発券当日限り有効) / 一般 1,800円 / 学生、高校生 1,500円 / 中学生以下、シニア、障害者手帳をお持ちの方 1,200円

『鬼に訊け 宮大工西岡常一の遺言』	『擬音 A FOLEY ARTIST』	『台湾、街かどの人形劇』
4/11～14、16、5/1～5	4/11～14、16、5/1～5	4/11～14、16、5/1～5
13:00	15:30	10:30
4/18～23	4/18～23	4/18～23
10:30	13:00	15:30
4/25～30	4/25～30	4/25～30
15:30	10:30	13:00

恵比壽ガーデンプレイス内
東京都写真美術館ホール
www.topmuseum.jp TEL: 03(3280)0099